

## 感性って、育つんだ！

水彩画の出来を競うテレビ番組で、誰が観ても笑える不細工な仕上がりに、指を差しながらお腹を抱えて妻も一緒に大笑いしている。しかも、よくそんな絵を描けるねなどと云いながら。

その様子を僕に気付かれて、ハツとした妻、あっ、笑っちゃう資格はないんだよね。

その通り。笑われても、笑う側にはなれないはず。

これまで長年一緒に過ごして来て、絵はまったくダメなの、などと云って例えいたずら書きにせよ、およそ「凶形」らしきものを、僕のの前ではポロツとも披露せずに来ている。

しかし、子供たちは観ていて、僕の知るところとなったのだ。

長女がまだ保育園の頃のこと。お母さん（僕の妻のこと）にはじめて絵を描いてもらって、びっくりしたそう。以来、大人になった今でも忘れられないという。

それが、ついこの間、

朝日新聞に掲載されていた、僕が一瞥してやり過ごした「モノクロ写真」（美的処理されていた）を観た妻が思わぬことを云った。

この辺から下は要らないのでは？と、手を覆ってトリミングしている。

何と、掲載されていた専門家の写真に批判を加えているのだ。

内心びっくりして、その写真を見直すも、十分うなずける意見だ。

現写真より無駄を無くして、多分写真の主が意図したよりも効果的な構図となるはずだ。それは現役時代少しばかり広告づくりの世界に身を置いたことのある僕の場合にも通じたものだった。

！？

感性って、育つんだ！正直、僕はびっくりした。あるいは所作のごとく、感性も常に一緒に居る者に「似る」のだろうか？

思えば、それぞれ思い思いに別のことをして過ごすよりも、同じような景色を、一緒にずーっと見て来ていたような気がする。

趣味は異なっているものの、映画も定期音楽会の鑑賞もそのジャンルも、山行きも旅も、ほぼ同じ体験を共にしてきている。

最近では、今朝の空の色、いつもとちよっと違うぞ、見てみ！などと、そして、いつの間にか、時折り描く僕の絵に、感想を求めたりもする

ようになっていた、妻の絵の一件をすっかり忘れて：

一方、こんなことがあった。

よく乗る二十分ほどの距離のバスの中から、今日は意識して外を見ている。妻とのひよんな会話から、僕の頭には沿線景色がまるで無い！ことに僕自身も半ば呆れて、景色の実態を検分するために乗車した。

えっ？ このことか！

新しくなった多摩消防署の屋上に、二階建ての集合住宅が乗っかっている。くだいようだが、公共の事業所の上に、住居が乗っている構図。

意味は違えど「屋上屋を重ねる」と云いたくなる「ナニコレ珍百景」、これまで見たことの無い景色をたった今、気が付いている。

屋上の二層は、よく見るマンシヨンの佇まいで、物干し竿があつて洗濯物が掛かっている所もある。こんな構造であるんだ！

さらに妻は、消防署の先の、確かテレビチャンピオンに登場したこともあるリフォームの会社や高級和食店など、僕の認識にまるで覚えの無いところも付け加えていた。

よく通う路線に身を置きながら、一体、今まで僕は、何を見ていたんだらう？

振り返ってみると、妻も僕も、それぞれの用事で、同じ路線バスを利用するが、僕は何ら集中していることも無く、書物を携行もしないたちでメモ書きもしない。

つまり同じ道中で、妻は景色を認識し、その変化に意識が働いている。一方、僕はただ車中に身を置いていて、ただで脳も休息している。

云いかえれば、妻には意識が働いて、僕には何ら無い。

意識があるかどうかで、これほどの違いが生ずる、典型と云っていい。  
.....

そこで僕は思った。

「感性」は、環境によって左右されるようになり、同時に、意識も欠かせない。環境で刺激を受けながら、関心を持ち続け、その度合いが強くなれば、「感性」も高まるって寸法なんだ！

妻には、環境に加えて、強い意識が常に有ったのかも知れない。だから、新聞掲載の写真批評の一件に及ぶようになつたのだ。